

〔論 文〕

17 世紀のイギリスにおけるペスト流行と教会 —Eyam 村の事例を中心に

安 田 典 子

1. はじめに

これまで人類は何度も感染症の脅威を経験してきた。14 世紀の黒死病と呼ばれたパンデミックに匹敵する激しさをもたらしたのは、17 世紀にヨーロッパを襲ったペストの大流行であった。イギリスでは、1665-1666 年にロンドンでペストの大流行 (the Great Plague of London) が起こり、およそ 10 万人 (人口の 20%) がペストで死亡した。*A Journal of the Plague Year* は、ジャーナリストのダニエル・デフォー (Daniel Defoe)¹ が 1722 年にロンドンのペストの大流行を克明に記した作品である。論者はこれまでデフォーの著書などを参考文献として、当時のロンドンでペストがどのように感染拡大し、犠牲者の規模や当局の政策、ペスト流行時の人々の信仰と教会の働きなどについて調べた。

同じ頃、ロンドンから離れたイーム (Eyam) 村もペストの感染で多くの教区民が犠牲となった。当時は宗教をめぐる分裂の時代であったが、イーム村のウィリアム・モンペッソン (William Mompesson) 牧師とピューリタンのトーマス・スタンリー (Thomas Stanley) 牧師は協力して、村人を説得し感染が収束するまで自主的隔離封鎖を行った。論者は、これまで諸文献などを参照し、隔離封鎖が実施されるまでのいきさつや教会の対応について、モンペッソン牧師の日誌と手紙から明らかにした²。

17 世紀のイーム村とロンドンのペストの流行状況における当時の教会の対応について、イギリス宗教史の中で重要なテーマとして論究されることはほとんどなかつ

1 ダニエル・デフォー (1660—1731) はロンドンで非国教会派の商人の家に生まれた。デフォー自身商人であり、ジャーナリストであり小説家であった。『ロビンソン・クルーソー』の作者としてよく知られる。1720 年にマルセイユでペストが大流行し、イギリスでもペストの警戒感が高まる中、危機感と使命感をもって執筆し、『ペストのしかるべき備え』(1722) という指南書と、その一ヶ月後に *A Journal of the Plague Year* (1722) を出版した。(ダニエル・デフォー・平井正穂訳『ペスト』1973 年、446-453 頁)。

2 安田典子「17 世紀イギリスのエピデミックにおける信仰と教会の一考察」、2021 年度日本基督教会近畿支部大会 (2022 年 3 月 17 日) における口頭発表。安田典子「17 世紀のイギリスにおけるペスト流行と教会 —Eyam 村の事例を中心に」、日本基督教会第 70 回学術大会 (2022 年 9 月 1 日) における口頭発表。

た³。本研究では、17 世紀のイギリスにおけるペスト感染拡大に対する教会の対応に関して、ロンドンとイーム村を対象に問題設定に基づいて、次の順序で議論を進める。第 2 章では、1665-1666 年のロンドンのペスト感染状況と市当局の政策について述べ、当時の人々がペスト流行時にどのような行動をとったのかを明らかにした。宗教において分裂の時代に、国教会の対応とピューリタン聖職者の行動やロンドンの人々の信仰について論じる。第 3 章では、イーム村の事例において、近隣の町へのペストの感染拡大を防ぐために、村の自主的な隔離封鎖へ導いた教会の対応について述べる。教派を超えて協力した 2 人の牧師は、村人を説得して自主的隔離封鎖を実行し、戸外での礼拝だけでなく教会教区の人々への牧会的配慮を行った。なお 3-4 で、同時期のペスト感染に対するロンドン当局の対策とイーム村の事例を比較し、両者の類似点と相違点から、イーム村の教会が果たす社会的役割について考察する。また 2 人の牧師の信仰とその関係性や、村人の信仰について論じる。第 4 章では、ペスト流行時における教会の対応と教派を超えた牧師の協力と信仰について、イーム村の自主的隔離封鎖の事例から明らかにする。歴史の中で繰り返される感染症と教会の対応における牧師の信仰理解から現代の課題を考察する。

2. 17 世紀にロンドンを襲ったペストの大流行

2-1 1665—1666 年のロンドンのペスト感染状況について

まず、ロンドン・ペストの感染拡大と収束の概要は以下の通りである。

1664 年 12 月初めにフランス人の 2 人の男が、ロンドン西側の聖ジャイルズ教区で死亡し、医師の検視によって死因はペストであると報告された⁴。彼らは最初の犠牲者で、感染の発端はオランダから届いた絹の包みが開封されたのが原因であった。1665 年 6 月に入ると疫病は恐ろしい勢いで広がり、死亡数は非常に増えた。5-6 月にかけて貴族階級や紳士階級の人々は、家族や奉公人を引き連れ、市街地の西側から逃げ出した。7 月半ば、1 週間で病死は全部で 1268 名、そのうちペストで 900 名以上が死亡した⁵。ペストがロンドンの西側から東側へ感染が進行し、8-9 月が頂点で 2 か月の間に、ペストによる死者は 5 万人と死亡週報に掲載された⁶。9 月にはペスト流行が峠を越え

3 次のイギリス宗教史の重要事項を論じた文献（事典や標準的な概説書）では、ペスト流行についての論述は見られない。THE OXFORD DICTIONARY OF THE CHRISTIAN CHURCH, Fourth Edition Edited by Andrew Louth, 2022. A History of Religion in Britain: Practice and Belief from Pre-Roman Time to the Present, Basil Blackwell Ltd, 1994. 浜林正夫『イギリス宗教史』、大月書店、1987 年。

4 Daniel Defoe, *A Journal of the Plague Year*; Fhaulkon, 1722, 26, (武田将明訳『ペストの記憶』、「英国十八世紀文学叢書」第 3 巻、研究社、2017 年、3-4 頁）。

5 Daniel Defoe, 35, 『ペストの記憶』、19 頁。

6 同書、122-123 頁。

激しさに翳りが出始めた。10 月の死亡週報のペスト死者数は、2665 名であった⁷。11 月第 1 週の死亡週報のペスト死者数は 400 人増え、3000 人が発病した。そのほとんどが長い避難生活からロンドンへ帰還した人々であった。毎週 1000 人～1800 人が死亡した⁸。12 月の週報の死者数は若干増えることもあったが再び下がり始めた。1666 年 2 月には誰もが疫病がすっかり片付いたと見なし、ロンドン市民は不安感から解放された⁹。

2-2 ロンドン市当局の疫病に対する政策ならびに条例

ペストによる感染が拡がりつつある 1665 年 6 月に、次の 4 つの条例がロンドン市長によって定められ、7 月 1 日施行された。(1)「ペストの流行に関し、ロンドン市長および区長によって制定・公布される条例 1665 年」¹⁰では、感染者が出た家屋に監視人を任命し四六時中監視させた。(2)「感染者の出た家屋とペスト患者に関する条例」¹¹では、ペスト患者は自宅に隔離され、家は閉鎖されて戸口に目印をつけて¹²、家財道具は焚火でいぶすか香料で浄化した。ペストによる死者の埋葬は夜明け前か日没後におこない、墓の深さは 6 フィートであった。(3)「街路を清掃し快適に保つための条例」¹³によって、家庭から出るごみや汚物は毎日清掃人によって収集された。(4)「節度のない者たちと無駄な集会に関する条例」¹⁴では、芝居や宴会を禁止した。17 世紀は、何度もペストが流行しており、疫病の再流行を防ぐために、行政当局が公衆衛生策を制度化した¹⁵。「家屋の閉鎖」という方策が最初にとられたのは、ジェームス一世即位の直後、1603 年のペスト流行時で、法令によって、家人もろとも患者の家を閉鎖する権限が認められた¹⁶。

7 同書、288-289 頁。

8 同書、293 頁。

9 同書、310 頁。

10 Daniel Defoe, 53-55, 『ペストの記憶』、48-51 頁。

11 Ibid. 55-58, 同書、51-56 頁。

12 THE DIARY OF SAMUEL PEPYS VOLUME 6 Edited by R.C. Latham AND W. Matthew, 1972, Unwin Hyman Limited, London. 『サミュエル・ピープスの日記』第 6 巻 1665 年、臼田昭訳、国文社、1990 年、161 頁。サミュエル・ピープスは当時海軍司令官秘書で彼の日記は 1660 年 1 月 1 日から 1669 年 5 月 31 日まで続いた。1666 年 6 月 7 日「... 今日、まったく気の進まぬことだったが、わたしはドルーリー・レインで、2, 3 軒の家の戸口に赤い十字のしるしがついていて、そこに「主よ、われらを憐れみたまえ」と書いてあるのを見た。悲しい光景だった。」

13 Daniel Defoe, 58, 『ペストの記憶』、56-57 頁。

14 Ibid. 58-59, 同書、57-59 頁。

15 Frank M. Snowden, *Epidemics and Society: From the Black Death to the Present*, Yale University Press, 2018. 桃井緑美子・塩原通緒訳『疫病の世界史上 黒死病・ナポレオン戦争・顕微鏡』明石書店、2021 年、106 頁。

16 『ペストの記憶』、47-48 頁。

2-3 ロンドン市民のペストへの対処

ロンドンの条例が施行される中、ロンドンの人々は次のように対処した。人々が市場で肉の切り身を買う場合、肉屋の手からじかに受け取らず、鉤にかかっているものを自分で外した。肉屋の方では、差し出された金には手をふれず、酢が入ったツボをあらかじめ用意してそれに入れさせた。買う方は、釣銭をもらいたくないため、いつも細かい金を用意し、手には香料や香水の瓶を持ち歩いた¹⁷。このように人々がペストの接触感染を避ける行動をとったと考えられる。貴族や上流の紳士たちや、田舎に地所を持った者は、家族や召使も引き連れ、市街地から脱出する人々の勢いは何週間も途絶えることはなかった¹⁸。

ペストの感染の勢いが衰えると、自宅に戻った人たちは、ペストに見舞われた家屋や家財を浄化し清潔にするための対策を実行した。例えば、密閉した部屋で芳香剤、香木、安息香、松脂や硫黄を焚き、火薬の爆風によって空気とともにすべてを一気に外へ追い出した¹⁹。デフォーは、この疫病が感染によって広まったのは明らかであり、感染は発散物と呼ぶ蒸気や煙が原因で、病人の息や汗が爛れた皮膚の発する悪臭か、別の何かを介して広まり、健康な人が病人と一定以上の距離まで近寄ると感染すると述べた²⁰。

2-4 「礼拝統一法」に対する非国教会派牧師の行動

ここで、ロンドンとイーム村でのペストの流行の背景となる 17 世紀のイングランドでの宗教状況を見ておこう。これは本章で論じるロンドン・ペストへの教会の対応と第 3 章でのイーム村でのペストへの対応とを理解するための前提である。

17 世紀前半のイングランドにおいては、カンタベリ大主教ウィリアム・ロードの指導のもと、イングランド国教会が人々に強制されていた。その後、1640 年に始まるピューリタン革命により、主教制と『共通祈祷書』は廃止されたが、1660 年の王政復古後にそれらは復活し、国教会が再建されることになった。

1662 年の「礼拝統一法」は、聖職禄と聖職の昇進を得ようとするものに以下のことを要求した。まず『共通祈祷書』を使用することだけでなく、それに書かれているすべての事に偽りのない同意と承諾の宣言をすることである²¹。スパー (Spurr) によれば、同意と承諾とは「それは真実である、そしてそれは合法であると信じて同意す

17 Daniel Defoe, 83, 『ペストの記憶』、98 頁。

18 同書、10-11 頁。

19 同書、310-311 頁。

20 同書、93 頁。

21 青柳かおり『イングランド国教会 包括と寛容の時代』、彩流社、2008 年、40 頁。

るということ」である。さらに主教による聖職按手式によって再び叙任されること、国王に対して武器を取らないという宣誓をすること、「厳粛な同盟と契約」を放棄すること、三十九箇条に署名することも求められた²²。これらの条件が障害となり、非国教徒聖職者は国教会主教による再叙任を受けなかったのである。彼らは『共通祈祷書』に書かれている洗礼や埋葬の儀式などには、神学的な誤りがあると考えていたので、それに書かれていることすべてに同意することはできなかった。さらに聖餐の時ひざまずくこと、洗礼における幼児の額への十字の印、サープリスの着用²³を要求する儀式に関する規定にも、聖書に根拠がなく、カトリック的であるという理由で同意できなかった。「厳粛な同盟と契約」を放棄することも障害となった。神の前での契約は侵されるべきではない、それを放棄すると、国教会から長老派へと国家宗教を変革する契約をやめることになると考えられたからである²⁴。1662年8月24日までには礼拝統一法に従わない非国教徒聖職者は聖職禄を得られなくなり貧困に陥った。一方、世俗の人々に対しては、1664年5月に「集会法」が定められ、16歳以上の者が、その家族を除いて5人以上集まってイングランド国教会と異なる礼拝集会を開くことは禁止された。さらに「集会法」を効果的にするため、1665年10月に「5マイル法」が制定され、非国教徒の礼拝集会をまわる聖職者は、自治体から5マイル以内に立ち入ることができなくなった²⁵。「礼拝統一法」によって教会禄を奪われたものは2000名近くに達し、また「5マイル法」によって自治体から追い出された者は、1600名に及んだ²⁶。1670年に「第二次集会法」が制定され、国教会と異なる礼拝に参加した16歳以上の者や、礼拝を開いた聖職者や集会所の持ち主には罰金を課した²⁷。

2-5 英国国教会とロンドンの人々の信仰

以上の国教会とピューリタンの対立を念頭に、ロンドンのペスト状況下における英国国教会と人々の信仰について次に述べる。最も危険な期間中でも、危険などは顧みず、教会での礼拝に欠かさず出席する人たちもいた。多くの聖職者たちが教会の門を固く閉ざし、他の人々と同じく自分の命を守るためロンドンを逃げ出していた。それでも誰もがそうしたわけではなく身の危険を冒してでも礼拝を執り行い、信者との集

22 同書、40頁。John Spurr, *Restoration Church*, 42, 43; Spellman, 36.

23 サープリス、スベルペリケウス(羅)、ラテン語の名称は冬の通常服ペリコアの上にまとう服に由来。アルブを短くしたもので、11世紀に最初の記録が見られ、13-14世紀に普及。吉田雅人『今さら聞けない!キリスト教 礼拝・祈祷書編』ウィリアムス神学館叢書Ⅰ、教文館、2019年、313頁。

24 青柳かおり、41頁。Spurr, "Church of England", 930, 931.

25 同書、41頁。

26 浜林正夫『イギリス宗教史』、大月書店、1987年、176頁。

27 青柳かおり、41頁。

会を続ける聖職者もいた。そこで彼らは絶えず祈りをささげ、時には説教や短い戒めの言葉によって、心を入れ替え、悔い改めるよう人々を促すのであった。非国教会派の場合も同じような集会を開いていた。しかも教区の司祭が亡くなるか逃げたりしていなくなったイングランド国教会の教会を使うこともあった。非常時に宗派の違いにこだわる余裕などなかったのである²⁸。

死にかかっている人たちは、牧師に対して慰めを与えるように、一緒に祈ってくれるように、悩みに耳を傾け、教え諭してほしいと願っていた。神を声高に呼ぶ人々は、赦しと慈悲を求め、自分の過去の罪を懺悔していた。政府は人々の信仰を奨励し、公式の礼拝について定め、断食して謙虚に自省する日を決めた。彼らが罪を告白して神の慈悲を希い、こうして頭上に迫っていた恐ろしい神罰を避けようとしたのである。多くの教会で朝と晩に礼拝がおこなわれ、それ以外の場所でも仲間で集まって祈りがささげられた。どの集まりにも人々は特別な熱意を込めて参加していた。教会の礼拝にたくさんの人々が集い、人の群れがあまりにも膨れ上がったために、しばしば教会の入り口のまわりに近づくこともできないほどであった。多くの家でも、教義とは特に関係なく、近親者だけを集めて家族で断食を守っていた。信仰の篤い人々は、悔悛と反省に身をささげていた²⁹。

先に見たように、宗教をめぐるとても不幸な分裂が生じていた。人々の間で宗派が対立し、教義もばらばらであった。1660 年に王政復古したことで、英国国教会は蘇っていたが、長老派や独立派、その他のあらゆる宗派の牧師や説教者が、別々に集会を開き、信者の数はそれほど多くはなく、礼拝の数も少なかったが、当時の政府はそれらを認めず、彼らの活動を弾圧していた。しかし、ペストがロンドンを襲いだすと、一時的に、教派に分裂した教会を再び一つに結び付けた。非国教徒のうち非常に優れた牧師や説教者たちが、国教会の教会に入ることを許されたのである。ペストの流行時には 1665 年制定の「5 マイル法」は厳格には遵守されなかったことになる。国教会の元の司祭が、ペストの恐怖に耐えられずに逃げ出していたが、信者の人たちは、代わりに来た牧師の説教を聞くために、前と変わらない様子で集まり、牧師がどんな教義を信じているかはあまりこだわらなかったようだ。ところがペスト感染がおさまると、どの教会にも本来の司祭が復帰し、司祭が亡くなった場合も、国教会が他の司祭を推挙して、すべてが元の流れに還ってしまった³⁰。

28 『ペストの記憶』、130 頁。

29 同書、36 頁。

30 同書、33-34 頁。『サミュエル・ピープスの日記』第 7 巻、53 頁。

3. 17 世紀のイーム村のペスト感染の事例

ロンドンでのペスト大流行と同じ時期に、ロンドンから 140 マイル離れたイーム村も、ペストによる感染で多くの犠牲者がでた。3 章ではイーム村の事例において、近隣の地域へのペストの感染拡大を防ぐために、村の自主的な隔離封鎖へ導いた教会の対応について述べる。また教派を超えて協力した 2 人の牧師の信仰とその関係性や、村人の信仰について論じる。なお 3-4 で、同時期のペスト感染に対するロンドン当局の対策とイーム村の事例を比較し、両方の類似点と相違点を挙げて、イーム村の教会が果たす社会的役割について考察する。

本章では、イーム村の事例について、以下のような複数の参考文献や資料の相互関係を調べ情報を整理した上で、歴史的事実の再現を試みた。

リチャード・ミード博士 (Dr. Richard Mead) は、モンペッソン牧師の息子ジョージ (George Mompesson) からイーム村の出来事に関しての情報を得ていたようだ³¹。そして、ミード博士の著書 *A Discourse on the Plague* が、イーム村の出来事についての最初の報告であると考えられる³²。またこの著作を引用したのが、*The History and Antiquities of Eyam*³³ と、*The Brave Men of Eyam*³⁴ である。そして、イーム村出身で郷土史家であったウィリアム・ウッド (William Wood) は、ミード博士や詩人・作家であるアンナ・スワード (Anna Seward)³⁵、スコットランドの作家アラン・カニンガム (Allan Cunningham) などが様々な時代の散文や韻文で描いた不幸な出来事から推論したようだ。ウッドの著書は、*The Brave Men of Eyam* や *The Story of Eyam Plague with a Guide to the Village*³⁶ や *Eyam: Plague Village*³⁷ に引用された。モンペッソン牧師の 3 つの手紙は、チャールズ・スワード (Charles Seward) の *Anecdotes of Illustrious Persons* に初めて出版され、以後様々な著書で再版された³⁸。イーム村のペスト流行時の死亡者リスト (the plague register) は記録された公式文書からのものである³⁹。

31 William Wood, *The History and Antiquities of Eyam*, 1859, 52-53. 「ジョージ・モンペッソンは、彼の父からイーム村の恐ろしい出来事の悲しい一部始終を何度も聞いていたことは疑いもない」。

32 Richard Mead, *A Discourse on the Plague*, London, A Millar and J. Brindley, the ninth edition, 1744, 150. 1719 年にマルセイユでペストが流行したため、ロンドンでペストが流行しないように、国王は国務長官を通じて、ジョージ二世の侍医ミードに疫病の予防に関する声明を作成するよう求めた。1720 年に *A Short Discourse concerning Pestilential Contagion and the Methods to be used to Prevent* が出版され、1744 年に第 9 版が発行された。ミード博士は一般的な隔離や燻蒸対策よりも病人を隔離病院 (Lazaretto) に 30 ～ 40 日間隔離の方が効果的であると主張した (80-83)。

33 William Wood, *The History and Antiquities of Eyam with A Minute Account of the Great Plague which Desolated that Village in the Year 1666*, third edition, London, Richard Keene, 1859.

34 Edward N Hoare, *The Brave Men of Eyam*, Society for Promoting Christian Knowledge, 1881.

35 シーワードはリッチフィールドの白鳥 (Swan of Lichfield) と呼ばれたロマン派の詩人。

36 Clarence Daniel, *The Story of Eyam Plague with a Guide to the Village*, 1979.

37 David Paul, *Eyam: Plague Village*, Amberley Publishing, 2012.

38 Edward N. Hoare, 2, 245-252. William Wood, 77-92. David Paul, 91-93, 96-97, 106-107.

39 David Paul, 114-123. William Wood, 126-129. Clarence Daniel, 87-90.

3-1 1665-1666 年のイーム村におけるペストの感染経路と拡大

イーム村のペストの感染経路の発端とみられるのは、1665 年 9 月にイーム村の仕立て屋職人ジョージ・ビッカース (George Viccars) が、ロンドンから布地の小包を受け取ったことが始まりである。その小包の中身が湿っていたので、暖炉の前で布地を乾かしていた時に、致命的な疫病を運ぶ蚤によって咬まれたと考えられる。数時間後に、彼は吐き気と頭痛を訴えて激しい震えに襲われ、うわごとを言った。巨大な腫物が彼の首に現れ始め、その範囲は彼の股間のあたりにも現れた。病気になって 3 日目に、疫病の斑点が彼の胸の上にも明らかにでた。激痛は亡くなるまで続いたようだ。彼はペストの最初の犠牲者となり、ウィリアム・モンペッソン牧師によって埋葬された⁴⁰。この病気は極めて近くで接触した人に感染が広がった。

イーム村がペストに見舞われた最初の数か月は、村に住む裕福な有力者は他の地域へ避難することができたが、教会区の非常に多くの人々は家に留まらざるをえなかった。イーム村でのペストの感染は、1666 年 11 月まで拡がり、アブラハム・モルテン (Abraham Morten) が最後の犠牲者であった⁴¹。モンペッソン牧師は、彼の叔父宛の手紙に「自分の教会区で 76 の家族がペストに見舞われ、259 人が亡くなった」と書いている⁴²。

3-2 モンペッソン牧師とピューリタンのスタンリー牧師の行動 —イーム村の自主的な隔離封鎖について

イーム村の状況が悪化して、接触感染によって近隣の町や村に拡げる恐れがあった。モンペッソン牧師はその村には他に指導者がいなかったため、教会区の前任者であったスタンリー牧師に協力を求め、2 回目のミーティングを行った。スタンリー牧師はペストの影響を軽減するために多くの手段を講じるべきだと提案した。ペストの効力を規制するための提言を述べるために、公開会議を日曜日の礼拝後に行うことを計画した。モンペッソン牧師は、ペストの封じ込めを確実にするために必要な対策について、スタンリー牧師と話し合い、村の中での正式な葬儀と、教会の敷地内の埋葬式をすぐにやめるべきであると、はじめに提案した。またモンペッソン牧師は疫病がイーム村から消えるまで教会を閉鎖し、礼拝を開かれた空間で行うべきだと提案した⁴³。

ペストが拡がるのを抑制する試みとして、隔離封鎖の形態が必要であり、これは封じ込めの唯一の方法であると 2 人は考えた。隔離封鎖は、概して人々の克己と神への

40 David Paul, 31-32. Richard Mead, 149-150.

41 David Paul, 105, 123.

42 Ibid. 126. The letter of William Mompesson to his uncle.

43 Ibid. 56.

信仰により、ここで支持されるとモンペッソン牧師は信じた⁴⁴。モンペッソン牧師がスカルビー (Scalby) にいた頃、ペストが拡がった時に、酢の中にお金を入れてコインから「ペストの種」を洗い流す方法を採用していた。イーム村においても、境界線にある石に穴をあけて、このシステムを用いれば、安全に他人へお金を手渡すことができるかと判断した。ロンドンでは、接触感染が増えるにつれて、人々はできるだけ早く死者を葬り始めており、ペストに感染した死体を 6 フィートの深さのところに葬っていることを、モンペッソン牧師は知っており、そのことを提案した⁴⁵。

会議の開催

1666 年 6 月 24 日 (日) の礼拝の説教でモンペッソン牧師は、ヨハネ福音書 15 章 13 節の「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」を選んだ。この説教は明らかに会衆の多くの心の中に深く刻みつけられたと、妻キャサリンはのちに回想した⁴⁶。

礼拝後、公開会議が開かれ大勢の人に加えて、礼拝に出席していなかった人々も一緒に参加した。会議は 1 時間以上にわたって続き、スタンリー牧師はモンペッソン牧師の側に立って支援した。周辺の村へペストが拡がるのを抑えるために、イーム村のまわりに防疫線を引くことについて、他の対策と一緒に議論した。多くの厳しい質問がなされて、教会区の中でこれらの決定を行うことに関して、多くの不安があったことは明らかであった。しかし、スタンリー牧師はその会議で折よく多くの仲裁に入ったため、いくつかのケースでは非常に不安と不確かさがあるものの、提案された事柄のすべては賛同された。スタンリー牧師は、防疫線がペストを抑制し希望的にはペストの削減に最も効果的な方法であると村人に強く信じさせて、安心感で満たせることができた⁴⁷。

会議で決まったこと

最終的に、決定に達したのは次の事柄である⁴⁸。村の中での葬儀は執り行わない。埋葬は教会の敷地内で行わないが、遺族によって、彼らの所有する土地に遺体を埋葬する。

次週の日曜日から、礼拝は教会から離れて執り行う。モンペッソン牧師は人々がお互いに密で近接した時にその病気が拡がることを知っていたので、野外で礼拝を行うのがより良いことだろうと考えた。従って礼拝では、お互いに距離を取って人々を立

44 David Paul, 57.

45 Ibid. 56.

46 Ibid. 59.

47 Ibid. 58.

48 Ibid. 58.

たせ、祈らせるように提案した。礼拝は村の生活の重要な側面であり、教会を閉鎖することに村人は同意した。礼拝は直ちにカックレット デルフ峡谷で行われることが決まった。

最終的に防疫線が村を囲むことになり、誰もこの規定された地域から外へ移動することはできない。来週、境界線は踏査者が見張りに立つことになった。次週の日曜日までに、村中のすべての人が境界線について伝えられ、また食料の支給が置かれる場所も知らされる。モンペッソン牧師はデヴォンシャー伯爵 (the Earl of Devonshire) に援助を求める手紙を送ることになった⁴⁹。

3-3 イーム村の防疫線による隔離封鎖⁵⁰と人々の生活

イーム村が自主的隔離封鎖に踏み切った時に、村の人々はどのような生活を送ったのか見てみよう。村人がよく知っている石や丘を目印にして、村を取り囲むようにサークルが引かれた。村人は誰も、感染していようとまいとそのサークルを超えることはできないと、取り決められた。この境界線の 2、3 か所で食料品が提供された。イーム村の北方の泉や小川は、品物が置かれる場所の一つであった。早朝、これらの品物は隣接した村の人によって運ばれた。モンペッソン牧師とスタンリー牧師によって任命された人が、それらの品物を取って来た。彼らがお金をもっていった時に、お金は泉や石のくぼみに置いて清浄し、お金を直接手渡すことによる接触感染を防いだ。品物を運んだ人はそのお金を泉で丁寧に洗って持ち帰った。食料や必要なものは、概してデヴォンシャー伯爵によって提供された⁵¹。

恐ろしい惨禍の間は、中からも外からもその衛生上の防疫線を誰も横断することはできなかった。村の周辺の地域がペストから守られたのは、この防疫線がペストの感染拡大を防いだからである。それはモンペッソン牧師の知恵によるが、それ以上に境界の内に踏みとどまった住民たちの勇気のおかげである⁵²。

3-4 イーム村の事例とロンドンのペスト大流行における類似点と相違点

2-2 で示したペスト流行時のロンドン市当局の対応と、イーム村の事例を比較して

49 David Paul, 60.

50 隔離封鎖について新しい研究でも注目されており、下記のような文献がある。

Giovanni Spitalè, *COVID-19 and the ethic of quarantine: a lesson from the Eyam plague*, *Medicine, Health Care and Philosophy*, 2020, 23:603-609. Joseph M. Snyder, "Our town has become a Golgotha": *perspectives on the history of and social perspectives on the history of and social responses to plague at Eyam, England, from September 1665 to November 1666*, *World History Bulletin*, 2020, 36:29-31.

51 William Wood, 65.

52 Ibid. 66.

類似点と相違点をまとめ、イーム村の教会が果たす社会的役割を考える。

ペストの感染による最初の犠牲者は、ロンドンの場合は、当時ペストが大流行したオランダから届いた布の包みを開封したことによって感染した⁵³。またイーム村でも、村の仕立屋職人が、ペストの大流行が起きているロンドンから布地の小包を受け取り、暖炉の前でその布地を乾かして、疫病を運ぶ蚤によって咬まれたようだ⁵⁴。これらの類似点として、ロンドンとイーム村のペストの流行がはじまったのは、外部のペスト流行地域から届いた布地がペストの感染源である。

ロンドンでは、調査員が病人をペストの発症と判明すれば、警官に命じてペスト患者の家屋を閉鎖した。それによって、ペスト患者と共に、健康な家族も一緒に家屋を閉鎖され、家屋ごとに監視人 2 名を任命し、1 日中監視した⁵⁵。一方イーム村では、村を取り囲む防疫線によって、イーム村全体を隔離封鎖した⁵⁶。ペストの流行の期間、防疫線に踏査者を置いて、イーム村の内外から誰も防疫線を横断することはできなかった⁵⁷。

ペストに汚染された家財の浄化については、ロンドンとイーム村では、寝具や衣類、カーテンや掛け布などは、再び使用する前に焚火でいぶした。さらにロンドンでは、調査員の指導のもとでおこなわれるが、感染した家屋内で用いられる既定の香料で浄めなければならなかった⁵⁸。

ロンドンでは、ペストによる死者の埋葬は、かならず夜明け前か日没後の適切な時間に治安官の了承を得ておこない、遺体を教会に運ぶ際に、死者の隣人や友人は誰ひとり付き添うことができなかった。ペスト患者の遺体は、教会の朝晩の祈りの時間や説教の時間に、教会内に埋葬することを禁じ、すべての墓は 6 フィートの深さがなければならなかった⁵⁹。また、イーム村では、埋葬は教会の敷地内で行わずに、遺族によって彼らの所有する土地にペスト患者の遺体を埋葬した⁶⁰。その際に 6 フィートの深さまで掘ることが要求された。

お金の受け渡しにおいて、ロンドンの肉屋は、客の差し出された金には手をふれず、酢が入ったツボをあらかじめ用意してそれに入れさせた。そして客の方は香料や香水の瓶を持ち歩き、他にも効き目のありそうなものは何でも用いた⁶¹。イーム村の人が、

53 Daniel Defoe, 26, 『ペストの記憶』、3 頁。

54 David Paul, 31.

55 Daniel Defoe, 53-55, 『ペストの記憶』、48-59 頁。

56 David Paul, 58.

57 William Wood, 66.

58 Daniel Defoe, 55-58, 『ペストの記憶』、51-56 頁。

59 Ibid, 55-58.

60 David Paul, 56.

61 Daniel Defoe, 83, 『ペストの記憶』、98 頁。

境界線で品物を受け取る際のお金の受け渡しは、お金を泉や石のくぼみに置いて清浄し、品物を運んだ人はそのお金を泉で丁寧に洗って持ち帰った⁶²。

ペスト感染防止の対策としては、人と人との接触を防止する、また汚染された物を浄化する、この2つの対策がある。以上のような対策とは別に、教会の対応はどうだろうか。

ロンドンでは、疫病が猛威を振るい人々が教会に来るのを怖がるようになった。聖職者の中には亡くなった人は多く、地方に去った人もいたが、1日2回、聖職者が礼拝を司る教会もいくつもあった。教会の扉はいつでも開いていたので、聖職者が礼拝をおこなっていてもいなくても、好きな時間に来て信徒用の個室に鍵をかけ、心からの情熱を傾けた祈りを神にささげる人々がいた⁶³。イーム村では、モンパッソン牧師は人々がお互いに密で近接しないように、野外で礼拝を行い、お互いに距離を取って人々を立たせ、祈らせるようにした。教会を閉鎖することに村人は同意し、カックレットデルフで礼拝が行われた⁶⁴。ロンドンでもイーム村でも、ペストの流行時には通常の礼拝の形式ではなかったが、礼拝をすることが守られ、祈りの場が確保された。

ロンドンでは、教区の司祭が亡くなるか逃げたりしていなくなったイングランド国教の教会を、非国教徒派の人々が集会で使うこともあった。非国教徒のうち非常に優れた牧師や説教者たちが、国教徒の教会に入ることを許された⁶⁵。イーム村は、モンパッソン牧師とピューリタンのスタンリー牧師が協力して公開会議を開き、村人を説得し感染が収束するまで自主的隔離封鎖を行なった⁶⁶。当時は宗教をめぐる分裂の時代であったが、ロンドンでもイーム村でもペストの流行を機に、教派を超えての協力が得られたと考えられる。

以上のロンドンの感染対策とイーム村の事例について比較したところ、ロンドンの行政当局は公衆衛生上の対策を制度化しているが、地方にあるイーム村ではエピソードの緊急事態には、ロンドンのような行政の仕組みが確立していなかったため、教会の牧師がその指導的役割を果たしていたと考えられる。イーム村の教会は、ペスト感染が拡がる中で教会区の人々に対して信仰の立場から精神的援助を与えるだけでなく、ペスト感染防止対策における主導的立場と役割が大きかったことがうかがえる。両者の比較から見てきたことは、ペスト感染時におけるロンドンの行政的対応と教会の宗教的役割がはっきりと区別されているのに比べ、イーム村の教

62 David Paul, 61.

63 『ペストの記憶』、98 頁。Separate pews（信徒席）かつては周囲を仕切られた個室の席。

64 David Paul, 60.

65 『ペストの記憶』、130 頁。

66 David Paul, 58.

会は宗教的側面に加え、社会的機能を担っていた事例から、ロンドンとイーム村の著しい違いが明らかになったと考える。

3-5 イーム村の隔離封鎖時の教会と村人の信仰

次に、イーム村における隔離封鎖時の教会のあり方と信仰について取り上げる。ここではボールの著作とウッドの研究内容から、以下のことが明らかになった。

1666 年 7 月 1 日 (日) の朝、初めてカックレット デルフで礼拝が執り行われた。それはいつもの礼拝とは確かに非常に違っていたが、出席している家族のほとんどから概ね賛成を得ていることが推測された。モンペッソン牧師は、命と希望が絶えず続くメッセージをしっかりと説教した。モンペッソン牧師は礼拝後の短い会議で、日曜日の 2 つの礼拝に加えて、水曜日と金曜日に礼拝を行うと伝えた。またデヴォンシャー伯爵からの手紙によると、彼の邸宅で使われているペストの薬を先渡しにし、彼の経費で食糧と医薬品を供給することに同意したと伝えた⁶⁷。

ウッドの研究からわかることは、教会は閉じられ、教会付属の墓地はもはや埋葬のために行くことはなかった。この期間、モンペッソン牧師は暑い天候のときに教会の中に人を集めることは危険であると思った。イームのやや南にある、人目につかない小さな峡谷のデルフで週に 2 回祈り、ツタに覆われた岩壁にアーチ型に穴をあけたところから、安息日のいつもの説教を行った。安息日の朝、一人一人が悲しみに沈んだ家を離れ、ある者は父を、ある者は母を、ある者は兄弟を、ある者は子どもが死と闘っている者のために償った。モンペッソン牧師は、岩のアーチの端に立って、ペストに対して持ちこたえることができるように、天に向けて神の慈悲を大声で呼び求めた⁶⁸。一方で、震える傍聴者の熱烈な応答がまわりの洞穴から響き渡った。この恐ろしい時期の敬虔な説教は、どれだけ厳粛で感動的であったに違いない⁶⁹。

これらの資料から、礼拝に関して次のようにまとめることができる。モンペッソン牧師は、公開会議後に教会を閉鎖して初めての日曜日に、野外で礼拝をおこない、村人のほとんどは賛同し礼拝に集まったようだ。イーム村中にペストの感染が拡がり、厳しい状況が続いていた時期に、人々が生きる希望を持ちつづけるために、モンペッソン牧師は安息日の礼拝と週 2 回の礼拝を欠かさず守り、祈り続け、説教においてキリストの福音を力強く宣べ伝えて、人々の信仰を確かなものへと導いたと考えられる。

67 Ibid. 64.

68 William Wood, 67.

69 Ibid. 67-68.

3-6 スタンリー牧師のイーム村における役割

次に、ピューリタンのスタンリー牧師がイーム村に留まり続けた経緯について取り上げ、イーム村のペスト流行時にスタンリー牧師の果たした役割の意義について考える。

1644 年、ピューリタン革命の時に、スタンリー牧師はイーム村の聖職禄に転職した。しかし 1660 年、王政復古でチャールズ二世が王位に戻ると、スタンリーは解任され、前職のアダム牧師が復職した。先に 2-4 で論じたように、1662 年「礼拝統一法」のために、スタンリー牧師は、牧師職を離れ聖職禄を辞し、新たな『共通祈祷書』の導入を認めなかった彼はイームやヘイズルフォード (Hazleford) の民家で説教を続けた⁷⁰。1664 年 4 月にアダム牧師の死去に伴い、モンペッソン牧師がイーム村の聖職禄に任命された。

これまでの資料から、論者の見解を述べておこう。ピューリタンのスタンリーは、聖職禄を失いながらも、村人から嘆願証明書が提出されるほど、イーム村の当時の聖職者アダムよりも人望があり、人々の精神的支えであったように思える。ペストの感染が猛威を振るう頃、イーム村で影響力のあるスタンリー牧師と、国教会のモンペッソン牧師が、教派の違いを乗り越えて協力することにより、イーム村で自主的隔離封鎖に踏み切ることができた。このように人々が防疫線から出入りすることを禁じたことで、イームの隣の町や村に感染が拡がらなかった。当時の村人には、モンペッソンよりもスタンリーの行為が評価されており、彼の多大な尽力と協力がなければ、モンペッソンだけでは成しえなかったであろう⁷¹。よってスタンリーのイーム村における役割は、非常に重要であったと考える。

3-7 モンペッソン牧師の信仰と葛藤—スタンリー牧師との関係性

次に、モンペッソン牧師の信仰について論じ、またイーム村に在住していたスタンリー牧師との関係について考察する。

モンペッソン牧師の妻は、ペストが消滅するまで 2 人の子どもたちと一緒に教会区を離れることを嘆願したが、モンペッソン牧師はその熱心な勧めにもかかわらず、頑なに教会区の人々と共に残るという責務を受け入れた⁷²。妻はモンペッソン牧師のそばから離れなかったが、ペストが教会区に蔓延している間は、子どもたちを親戚宅へ避難させることに同意した。モンペッソン牧師は神の召命と教会区の信徒に対して忠

70 David Paul, 129.

71 Ibid. 131.

72 Ibid. 48.

実にとどまることが神から託された責務だと信じていた。そしてそのような崇高な重責を負う務めは、命より大切であると、彼は考えていた⁷³。1666 年 8 月 25 日にモンペッソン牧師の妻キャサリンがペストによる感染で亡くなった。妻の死後、モンペッソン牧師は心を取り乱し、深い悲しみに満たされ、後悔の念と責任を感じていたようだ⁷⁴。その数日後モンペッソン牧師は、親戚宅へ避難させている子どもたちへ母親の死を伝え、彼女の深い信仰について手紙で書き送った⁷⁵。家族を犠牲にしたことへの心の葛藤がモンペッソン牧師の手紙から窺える。

当時、イームの教区民のかかなりの人々は、なおひそかにピューリタンの教義に忠誠を持っていたので、スタンリー牧師は彼らへの静かな影響力があった。モンペッソン牧師は、スタンリー牧師のイーム村での立場と、先に述べたように、スタンリー牧師が「礼拝統一法」を拒否しイーム村に居続けることに対して、懐疑的な思いを抱いていたので、スタンリー牧師の支援を受けることに、はじめは躊躇していたようである。しかし感染拡大を防ぐ方法を模索していくうちに、イーム村に影響力をもつスタンリー牧師の協力が必要であるとモンペッソン牧師は確信するようになった。そしてペストの感染拡大の時期に、モンペッソン牧師とスタンリー牧師は協力し多くの重要な決定をした⁷⁶。また彼らは共に、昼夜を問わず、教会区の病人や死にゆく人への牧会的配慮をおこなった⁷⁷。2 人の牧師はペストの感染で容体が悪化していく人を訪ねて、遺言書 (the last will and testament) を作成したり、遺言の執行に立ち会った⁷⁸。ペストが蔓延する中で、モンペッソン牧師は安息日の礼拝と週 2 回の礼拝をおこない、教区民と共に祈り、彼らに希望のメッセージを与え続けたことで、人々がペストによる困難な状況を、信仰をもって克服することができたようだ。

イーム村の事例は当時の教会の宗教的立場に加え、教会が社会的機能を担ったことが功を奏したと考える。教区での教派間の対立を超えて、イーム村の 2 人の牧師が親密に協働して、村人を説得しながら防疫線を実践し、近隣の町や村へのペストの感染拡大を防ぐことに成功した。モンペッソン牧師がスタンリー牧師と協力することを判断したのは、彼の功績であると考ええる。エピソードの非常事態におけるモンペッソン牧師の葛藤とその心情が、彼の私信から読み取れる。

73 Ibid. 37.

74 Ibid. 9.

75 Ibid. 91-93, The letter of William Mompesson to his children, モンペッソンは妻に「誰によって、どのような理由で救いを待ち、どんな確信が持てるのか」と神学的な質問をすると、妻は望ましい理にかなった答えをした。

76 Ibid. 124-128.

77 Ibid. 31.

78 Ibid. 33-34, 61-64.

3-8 イーム村の事例において、明らかになったこと

17 世紀にイーム村を襲ったペスト流行時に、教会教区のモンペッソン牧師と前任者であるピューリタンのスタンリー牧師は、教派の違いを乗り越えて協力し、イーム村の人々を説得して自主的隔離封鎖へ導いた。村の公開会議で様々な感染対策を取り決め実行して行く上で、教会は社会的機能を担った。その間、モンペッソン牧師は峡谷で礼拝を続け人々と共に祈りをささげ希望を与え続けた。また 2 人の牧師は、親密に協働してペストの感染患者や死にゆく人々を訪ね牧会的配慮を行った。隔離封鎖で近隣の町へのペストの感染拡大を防ぐことができたが、一方で多くのイーム村の人々が犠牲になったことは、モンペッソン牧師の叔父宛の手紙の中で明らかにされている⁷⁹。「この地での状況は非常に恐ろしく、歴史上前例がないと信じる。実を言うと私たちの町がゴルゴダ、されこうべの場所であり、私たちの少ない残りの者を去らせてはいないし、私たちはソドムとゴモラのようにでもあると言うかもしれない。私の耳はそのような悲嘆な嘆きの声を決して聞いたことがない。わたしの鼻はそのような不快な臭いをにおったことがない。わたしの目はそのような異常な光景を見たことがない。私の教会区で 76 家族がペストに見舞われ、そのうち 259 人が死亡した」。

モンペッソン牧師はペストが去った後も、さらに 3 年間イーム教会区で牧師の職務を続け、共同体を立て直し支えた。その後、ノッティンガムシャー (Nottinghamshire) のイークリング (Eakring) 教会区の聖職禄を推薦され転任した⁸⁰。

4. おわりに

本研究では、感染症と教会について歴史の観点から取り上げ、17 世紀のペスト流行における教会の対応について論じた。当時は宗教をめぐる分裂の時代であったが、イーム村のモンペッソン牧師とピューリタンのスタンリー牧師が教派を超えて協力し、周辺の地域へのペスト感染を抑えるために防疫線が効果的であると、村人を納得させ実行することができた。また 2 人の牧師の指導的立場によって、イーム村でのペストの対策を決定し、ペスト感染した病人や死を前にした人々への牧会的配慮が行われた。さらにモンペッソン牧師は、峡谷で毎週の礼拝を行い、人々と共に祈りをささげ、村人への信仰的また精神的な支えを担った。同時期のロンドンの感染対策と

79 Ibid. 106, The letter of William Mompesson to his uncle. 「ソドムの支配者らよ、主の言葉を聞け。ゴモラの民よ わたしたちの神の教えに耳を傾けよ」 イザヤ 1 章 10 節。

80 Ibid. 127-128. モンペッソン牧師は 1670 年に再婚し、38 年間イークリングで牧会をしたのち、1708 年 3 月 7 日に 70 歳で亡くなった。イーリング教会のチャセル (Chancel, 礼拝堂の内陣) に 3 つのステンドグラスがささげられ、モンペッソン牧師のイーム村での功績をたたえた。

イーム村の事例について比較したところ、ロンドンの行政当局は公衆衛生上の対策を制度化しているが、地方のイーム村では教会の牧師がその指導的役割を果たしていたと考えられる。ロンドンとイーム村の比較から見てきたことは、ペスト感染時におけるロンドンの行政的対応と教会の宗教的役割がはっきりと区別されているのに対して、イーム村の教会が宗教的側面に加え、社会的機能を担っていることである。ロンドンとイーム村の著しい違いがここに明らかになったと考える。

イーム村の自主的隔離封鎖の結果、近隣の町へのペストの感染拡大を防ぐことができた。イーム村の人々がこの隔離封鎖にどうして協力し継続できたのかについて、モンペッソン牧師の私信や説教から解明することは、17 世紀の民衆の宗教性を理解し、近代から現代に至る医療と宗教との関係を論じる上で重要な基礎作業となる。

2020 年 3 月に世界保健機関 (WHO) は「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言し新型コロナウイルスがパンデミック流行下にあると発表した。そして 2023 年 5 月に WHO は「緊急事態宣言」の終了を報じたが、この 3 年間で世界の感染者は累計 7 億 6500 万人以上が感染しており、感染による死者数は 690 万人を超えた。この間、コロナ禍に際して、教会はさまざまな対応に迫られた。緊急事態宣言が発出された各都道府県の教会では、礼拝そのもののあり方の対応に苦慮した時期である。現在は礼拝の対面とオンライン配信でおこなうことが通常になり、聖餐式や洗礼式をオンラインで執り行うことも検討される時代になった。

このような現代の私たちが直面している問題を考える上でも、歴史の中で繰り返される感染症と教会の対応における牧師の信仰理解を調べることは、パンデミック時代の現代において意義があると考えられる。なお、17 世紀のペスト感染に対する牧師たちの対応を通して、ペスト流行時に、イギリスにおいて教派を超えた協力の意義を明らかにすることが、今後の研究課題となると考える。

参考文献

- Daniel Defoe, *Journal of the Plague Year*, Fhaulkon. 1722. 武田将明訳『ペストの記憶』、「英国十八世紀文学叢書」第 3 巻、研究社、2017 年。
- David Paul, *Eyam : Plague Village*, Amberley Publishing, 2012.
- Edward N. Hoare, *The Brave Men of Eyam; or, a Tale of the Great Plague Year*, Society for Promoting Christian Knowledge, 1881.
- Frank M. Snowden, *Epidemics and Society: From the Black Death to the Present*, Yale University Press, 2018.
- 桃井緑美子・塩原通緒訳『疫病の世界史上 / 下』明石書店、2021 年。
- Giovanni Spitalè, *COVID-19 and the ethic of quarantine: a lesson from the Eyam plague*, *Medicine, Health Care and Philosophy*, 2020, 23:603-609.
- Joseph M. Snyder, "Our town has become a Golgotha": perspectives on the history of and social perspectives

on the history of and social responses to plague at Eyam, England, from September 1665 to November 1666, World History Bulletin, 2020, 36:29-31.

Richard Mead, *A Discourse on the Plague*, A Millar and J. Brindley, 1721.

Samuel Pepys, *THE DIARY OF SAMUEL PEPYS VOLUME 6* edited by R.C. Latham AND W. Matthew, 1972, Unwin Hyman Limited, London. 『サミュエル・ピープスの日記』第6巻 1665 年、臼田昭訳、国文社、1990 年。

William Wood, *The History and Antiquities of Eyam; with a minute account of the great plague which desolated that village in the year 1666*, third edition, Bell and Daldy, 1859.

Revd William Mompesson's three letters (31 August 1666, 1 September 1666, 20 November 1666). David Paul, 91-93, 96-97, 106-107. Edward N. Hoare, 245-252, William Wood, 77-92.

THE OXFORD DICTIONARY OF THE CHRISTIAN CHURCH, Fourth Edition Edited by Andrew Louth, 2022.

A History of Religion in Britain: Practice and Belief from Pre-Roman Time to the Present, Basil Blackwell Ltd, 1994.

青柳かおり『イングランド国教会 包括と寛容の時代』、彩流社、2008 年。

浜林正夫『イギリス宗教史』、大月書店、1987 年。

吉田雅人『今さら聞けない!? キリスト教一礼拝・祈祷書編』（ウイリアムス神学館叢書 I）、教文館、2019 年。

【Abstract】

Plague of 17th Century England and the Church: A Study of the Case of Eyam Village.

YASUDA Noriko

There has been very little scholarly research within English religious history into the Church's response to plague in the 17th century. This essay examines the Church's response to plague in Eyam Village, especially as juxtaposed with the civil authorities' policies out of London. Between 1665 and 1666, a great plague spread throughout London, killing approximately one hundred thousand people (20% of the total population). During this time seventy-six families in Eyam Village were afflicted with plague and two hundred and fifty-nine people lost their lives. This period was punctuated by a schism in the English Church, and though the presiding pastor of Eyam Village Pastor Mompesson and his Puritan predecessor Rector Stanley held opposing views regarding church doctrine and liturgy, the two clerics worked closely together to mitigate the plague and its effects. As an example, they successfully persuaded the villagers to not pass beyond a cordon sanitaire in an effort to prevent spreading the plague to neighboring villages. During this period, they closed the church, discouraged assemblies within the valley, and conducted weekly religious services. This self-imposed isolation was a success, and not a single person outside the village died from plague. This information regarding plague-riddled Eyam village was gleaned by examining primary sources such as Pastor Mompesson's personal letters. By juxtaposing the two cases of Eyam Village and London, and how the plague was handled in either locale, significant similarities and differences emerged. In particular, the religious role of the Church and its social functions within Eyam Village became clear. Investigating clerical understandings of religious faith as part of the Church's response to historically recurring pandemics has academic and social significance, particularly in light of the recent global pandemic.